Graduation Thesis Summaries in 2019

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Department, Archaeology Kanazawa University メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00057300

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学考古学紀要 41　2020,　121-124.

金沢大学考古学研究室 2019 年度卒業論文概要

金沢大学考古学研究室

山形県・秋田県の四爪鉄錨の集成と四爪鉄錨の地域的な特徴および傾向

石田　尊

日本は四方を海に囲まれており、その経済は古くから海運によって支えられてきた。当時 活躍した廻船は木造であったため今では失われてしまっているが、船載品として鉄製の錨 が残されている。錨を調査することで当時の海運の実態に触れることができると考え、本論文での調査対象とした。本論文では、錨の中でも江戸～明治時代にかけて広く用いられた「四爪鉄錨」を研究対象として、調査、分析、考察を行う。研究の目的は全国各地に点在し ている四爪鉄錨の分布の特徴や地域的な傾向を明らかにすることである。論文では、まず調 査対象を定義したうえで研究史に触れ、実際に調査を行う。その後、調査結果と先行研究を 合わせて全国的な特徴、傾向を分析し、最後に分析結果について考察していく。

日本列島における先史時代のヒトとネコの関係について

泉屋奏子

熊本県上代町遺跡群、長崎県石路遺跡 B 地点では、それぞれ弥生時代、古墳時代のネコ とみられる骨が出土しており、日本列島における先史時代のヒトとネコの関係を論じる上で貴重な資料である。本論文では、各遺跡におけるヒトとネコの関係を復元するために、こ れらの資料と日本列島に生息する野生のツシマヤマネコや中世以降の遺跡から出土した家畜と想定されるネコ、またネコの主な餌と想定されるネズミの骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比分析を行ってネコの食性評価を試みた。また、後世の混入でないかを確かめるた めに年代測定を併せて行った。その結果、上代町遺跡群出土ネコは弥生時代中期相当の年代 を示し、陸生資源に依存したことが示唆された。一方で、石路遺跡 B 地点出土ネコは古墳 時代終末期相当の年代を示し、直接的あるいは間接的に海生資源に依存した食生活を送ったことが示唆された。またこれらの分析結果から、少なくとも古墳時代終末期には、ヒトの生活圏で食物資源を摂取したネコが存在したことが示された。

古代エジプト新王国時代におけるチャリオット構造と装飾の一考察

岡部　睦

「チャリオット」とは古代戦車を指し、一般的に西アジアからエジプトへと流入したと考えられている。本研究では、各地域の文化間交流がエジプト社会に起こす変容を明らかにすることを大きなテーマとして設定し、エジプトにおけるチャリオットの変容を本論文で考察する。本稿では、特に新王国時代の考古資料 9 点と図像資料 135 点を研究対象とし、考古資料と図像資料の双方の観点からチャリオットの構造と装飾の特徴を包括的に検討することで、エジプト化されるチャリオットの装飾や構造の変遷をとらえるとともに、王家と高官のチャリオットの差異やチャリオットの用途による特徴の差異について明らかにすることを目的としている。

古代エジプトのチャリオットについては、これまでその起源や使用用途、使用武器との関連性、チャリオット導入後の社会変化など多岐にわたる研究が進められてきた。既往研究では、考古遺物について、その形態や装飾の様子からチャリオットの用途や付属部品の設置場所について検討が行われた。また図像資料の観点からは、チャリオットが描かれる場面に注目した研究が主に行われ、加えて車輪の輻（スポーク）部分の本数から年代を検討するというような研究が行われている。以上の研究から、チャリオットが実際に使用されていた際の様子や、用途について戦闘用以外にも儀礼用として使用されていたものもあるという可能性、描

かれる主題から当時の古代エジプトの社会的な背景などについて示されている。一方で、エジプトにおけるチャリオットの出土例は極めて少なく、エジプトのチャリオットの形態変化について年代を追って研究されているものは少ない。このため、本稿では考古資料 9 点に加え 135 点の図像資料とともに検討することで、古代エジプトのチャリオットの特徴の変化について検討することとする。また、既往研究の問題点として、考古遺物と図像遺物の両者の検討がされているものが少ない点、網羅的な図像集成がされていない点、図像資料について場面に注目される傾向にある一方で、チャリオット自体に注目されるものが少ない点が挙げられる。よって本稿では以上の条件を満たすとともに、分析にあたって、一部のチャリオットの考古遺物と図像資料については自身で直接遺物や資料を観察する点にこだわった。加えて図像資料については、これまでに網羅的な集成が行われて無かった点を受けて集成を行った資料を取り扱い、部分ごとの詳細な観点を設けて分析を行った。

分析の結果、チャリオットの年代による形態の変遷、王家と高官チャリオットの違い、チャリオットの用途による特徴の違いの 3 点について検討し、新王国時代のエジプトにおけるチャリオットの変容の様子について考察を行った。チャリオットの年代による形態の変遷としては、アクエンアテン王治世前後での車体の変容がみられ、図像資料についてはチャリオットの車体の表現自体にもアマルナ美術の影響があると考えられる。また、用途の変遷としては、主に車輪のタイヤとスポークの本数の変化から、その用途の変化について考察を行い、車体の安定化がアクエンアテン王の治世以降に重視された傾向にあると考える。王家のチャリオットにおける用途の違いとしては、前フレームの有無が大きく関係しており、このような構造を持つチャリオットについて、考古資料と図像資料の双方から検討した結果、儀礼用として使用されていたと示唆できる。

弥生のミニチュア土器における性格の違いについて
―指頭痕に着目した検討―

鏡　百恵

土器といわれるものの中には、通常のものに比べて極端に小さいものが存在し、それらはミニチュア土器の他に、袖珍土器・手づくね土器・小型土器・小形土器と呼ばれ、通常の土器とは区別されて認識されてきた。しかしながら、ミニチュア土器自体に注目した研究は少なく、小型であるというだけでひとくくりに用途不明品、祭祀用品とされる傾向にある。ミニチュア土器と呼ばれるものの中でも、法量や精粗など個体差が大きく、時期や遺跡によって出土状況や個数、地点に違いがみられる。すべてを一概に祭祀用具ということはできず、性格の違いを見出す検討の余地があるのではないかと考える。

本研究ではその性格の違いを見出すことを目的とする。指頭痕サイズの比較により製作者の違いを検討するとともに、調整方法にも着目して模倣性を考慮した形態分類を行い、八日市地方遺跡出土ミニチュア土器について考察を加える。土器に残された指頭痕に着目して調査・分析を行うが、元の指を復元することは難しいという問題を克服するため、小松市埋蔵文化財センター下濱貴子氏のご教授により、ミニチュア土器の指頭痕サイズと小波状口縁土器、焼成粘土塊の指頭痕サイズ比較し、相対的に小さいものがないかをみることとした。石川県小松市八日市地方遺跡出土のミニチュア土器 112 点、小波状口縁の土器 15 点、焼成粘土塊 3 点について、調整方法の観察や指頭痕サイズの計測、写真撮影などを行った。

指頭痕と明瞭な指ナデを発見し、そのサイズを計測したものは 61 点であった。小波状口縁の土器の口縁部の押圧痕について、押圧方法の復元を試み、指幅を反映する押圧方法の個体は 4 点のみであることが判明した。予定よりも比較対象が大幅に少なくなってしまったが、ミニチュア土器41 点と小波口縁の土器4 点、焼成粘土塊 3 点の指頭痕サイズの比較を行った。全体的にミニチュア土器の指頭痕は小波状口縁の土器、焼成粘土塊の指頭痕よりも小さい傾向にあった。小波状口縁の指頭痕の中でも最も小さい短辺 0.56 ㎝を基準とし、これより小さい範囲のもの 7 点のミニチュア土器を指頭痕が小さいサイズのミニチュア土器と考えた。

ミニチュア土器の通常の法量の土器への模倣性を考慮した形態分類を行い、出土地点をふまえた検討を行った。様々な形態が混在する出土エリアもみられる一方で、同時期、同成形方法、類似した調整方法の土

器が出土する地点もみられ、同じ目的のために製作されたセット関係にある可能性がみられた。指頭痕が小さいものについては、安直に子どもが製作したものとはいえないが、調整方法や模倣がみられる形態であることから、子どもが大人のつくる通常の法量の土器をまねてつくったものという可能性を想定できるという結果となった。加えて、祭祀説が濃厚な古墳時代の手づくね土器の調査を行ったところ、こちらはある目的のために数人の限られた製作者によって長期的な時間差はなく製作されたと推測される。これらのことから、八日市地方遺跡のミニチュア土器は子どもから大人まで異なる製作者が携わっており、異なる目的のために製作した、異なる種類の土器を内包している可能性が高いと考えられる。

用地の正面観について―金谷出丸・尾山神社の事例―

川村圭子

本研究では、金谷出丸の東西南北面の様子の変遷を調査し、用地、特に神社における正面観に影響を与える内的要因と外的要因についての考察を行った。金谷出丸とは、金沢城西端 にある一画で、藩政期には金谷御殿として前藩主らの隠居地となり、明治以降は尾山神社の 境内として使用されている。この出丸において正面とされた方角は、藩政期では北とされた のに対して、明治以降は西に変化している。この事例に着目し、用地における正面観には用 地内部の状況である内的要因と、周辺状況という外的要因の 2 つが影響すると仮定した。

金谷出丸の開発経過と、出丸への進入経路の変遷、及び各時代の東西南北面の様子につい て調査と検討を行った結果、この仮説の裏付けをとることができた。さらに、これら 2 要因 は複合的に影響を与えていることが判明した。また、類例である明治神宮との比較により、同じく人を祀る近代神社であっても、思想の違いから社殿計画に差異が現れることが明ら かになった。新たな外的要因としては、現在復元工事中の鼠多門及び橋の完成、つまり金沢 城から直接出丸に至る藩政期の進入経路が復活することが挙げられる。今後もこのような 用地を取り巻く 2 要因の変化により、金谷出丸の正面観は移り変わっていくと思われる。

富山県出土の土人形・土製品と天神について

田中小鞠

本稿での天神信仰は菅原道真を天神として崇める行為を指す。富山県では木彫りの彫刻、掛け軸、土人形など様々な形で天神を崇めているが、そうした信仰の一つが天神堂である。天神堂とは天神と何種類かの人形をセットとして、天神堂と呼ばれるお堂に飾る行為である。本稿では富山県内で出土した天神堂の構成要素と思われる土人形・土製品を研究対象とした。なぜなら土人形という観点から北陸の天神信仰を研究したものは少なく、天神堂のセットができたと証明された明治期以前にも現代と同じような構成要素で天神堂が行われていたかどうかを、出土品を分析することで明らかにできるのではないかと予想したからである。

そして、先行研究をもとに、

・問題①　天神堂のセット関係が出土品から読み取れるか、

・問題②　県内の出土地では出土する人形の特徴は異なるのか、

という 2 つの問題について分析することを本稿の目的とする。

分析対象の土人形および土製品は、富山県内出土のもので、先行研究において天神堂のセットだと定義されたものとする。具体的な分析方法としては以下の方法をとる。

・出土人形を、どの種類がどこの遺跡から出土したか分類する。

・同じ種類の人形同士を、タイプや大きさで比較する。

・対象となる人形が出土した遺跡の分布図を作成する。

分析、考察した結果、

・問題①　天神堂のセット関係とされる人形が同一の溝から出土したことから、天神堂のセット関係が成立していたともいえる。ただ、同じ溝から他の人形も出土していたことから、明確に関連性があったとは言い切れない。大門哲氏は、天神に属性を付け足すために他の人形や製品が付け足されたとしたが、集めた資料からそれを読み取ることができる。

・問題②　富山県内の出土地では出土する遺跡に偏りがあったことが分かり、武家が多かった富山城近隣や旧金沢領である地域では藩主を崇めるように天神信仰を行ったという西村忠氏の説を裏付けるような結果となった。大門氏の研究では天神堂をそろえるには多く

の費用が必要とされていたことや、富山城が最も種類や出土数が多かったことから、安価とされる土製の人形でもそろえることができるのは、そうした製品が多く流通したであろう城下町に住む人であったと考えられる。

グスクの変遷と首里城の正殿の編年について

宮林菜々子

グスクは 13 世紀から 15 世紀にかけて構築され、北は奄美諸島から南は八重山諸島のいわゆる南西諸島に分布している。琉球全体では 250 ～ 300 のグスクがあるとされ、大きく分けて城塞的性格と聖域的性格の二通りがあるが、琉球列島に分布するグスクのその多くが城塞的施設を備えているだけでなく、内部に聖域とされる「御嶽」を備えている。

グスクの研究において、考古学的発掘調査だけでなく、他の同時代の集落遺跡との社会関係、つまりグスク時代の共同体的関係の中に位置づけが、グスクの居住者の性格解明に、求められている。

本稿は安里進氏著の「グスク・共同体・村―沖縄歴史考古学序説―」(琉球弧叢書･6　榕樹書林、1998 年) を基本筋として、他の著書も参考にしつつ、本文に沿ってグスクの分類やその性格、考古学的分析をまとめた。